

## 磨崖仏の話

私の世代ならみんなそうだろうけど、幼少の頃、よく手塚治虫を読んだ。ハマってしまい、耽読し、尊敬し、敬愛するというほどではなかったけど、例えば“火の鳥”などという大作は、全部揃えて読み漁った記憶がある（そういえばあの漫画はどこへ行ったのだろう。実家に帰っても見かけた記憶がない。どこかに捨ててしまったのだろうか。それが卒業ということなら悲しい話だ）。

その“火の鳥”の中に、“鳳凰編”というのがある。というかもその漫画は持っていないので自分の記憶を探りながら、ネットで検索しただけの話であるが、これがなかなかの傑作だった。何故、傑作かという、こうして今でもその話を憶えていることと、折に触れてその一場面を思い出してしまうからである。

どんな話かと言えば、奈良時代に生きた二人の仏師が確執を繰り返しながら仏像を彫り続けるという、人間の不条理さや、業の深さ、そして不可思議な輪廻、というテーマを描いたものである。その中の主人公の一人である、我王と言う名の悪党のことが、今も私の記憶の中に、強烈に刻まれている。うろ覚えだが、我王は、生まれてすぐ、片目、片手を失い、その恨みからあらゆる悪事を繰り返す。それがふとしたことがきっかけで、仏師と言う天賦の才能が目覚め、そこから仏を彫り続けるのであるが、詳しいことは是非読んで確かめてもらいたい。何せ手元になくうろ覚えの記憶を頼りに書いているものだから、間違っていたら手塚先生に申し訳ない。

ただ一つ、いまだに、コマ割りや、絵の形、セリフまで、ほぼ正確な形で、記憶の中で鮮明に残っているのが、ラストシーンである。因果応報の結果、ついに両手両足を失った我王は、言葉も失い、感情も失うのだが、口にノミを加えてひたすら仏像を彫り続ける。日本中を這うようにして放浪を続け、そこにある石や岩などに仏を彫り続け、それが今でも日本中のあちこちに残っている、という終わり方だった。

先日、ふとしたきっかけで大分県を旅することがあった、そこで目にしたのは磨崖仏（まがいぶつ）と呼ばれる、天然の岩に掘られた数々の石仏だった。聞けば日本にある磨崖仏の7～8割が大分県に存在し、しかもその中で有名なものは、臼杵市や国東半島などという、観光地としては全国的にはあまり知られていないところに点在しているとのことだった。実際にこの目でこの目で見たのは数点に過ぎないが、どれも純朴で素朴な優しさと美しさにあふれていた。人を集めるための仰々しさや、見る人を驚かすためのおどろおどろしさ、と言ったものとは無縁のものだった。

お恥ずかしい話であるが、行くまでは全く知らない話だった。磨崖仏を茫然と見上げながら、我王は実在したのか、と錯覚した。いや、手塚治虫はこの磨崖仏を実際に見聞したのだろうとも思った。いずれにしろ、有名無名にかかわらず、人間にはいつの時代にも、何かしらとてつもなく大きな力が宿っているのだということを痛感した。

“仁王”といい“磨崖仏”といい、どうやら私はこの、“何かを彫り出していく”という作業に強烈な感動を覚えてしまうようである。

